No. 138号
OB・Gニュース
二〇十八年十月一日
発行責任者
社民党がんばれOB・G福島の会
eメール huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp

雇止め
麻生さんには
関係ねぇ
（服部靖男・愚作集より）

「一強政権」のおごりと
数の横暴に「ノー」の意思を!!

自民党の総裁選挙は安倍現総裁が三選を手にした。しかし、予想を上回る石破氏への支持は、議員票でもそして党員票においても拡大をする結果となった。もちろん総理大臣指名については、国会における「選挙」をまたなければならないが、与党が衆議院議員の過半数を超える国会である。よって残念だが「安倍総理大臣の三選は既成の事実」となる。

党の代表選には私たち一般の有権者はかかわれない。かかわれるのは国政選挙であるが、大多数の議席を与党自民党に与えてしまった。

さて、今般の総裁選挙の中で見えてきたものは何か。それは「これからの日本を託す政治家・安倍晋三氏」に対する不信がさらに強くなったということである。

大統領のツイーターが米国では公文書に

時を同じくして、米国においてはトランプ大統領に対する批判がメデアのみならず政権内からも公然と行われていた。とりわけ「平和の政治家」としてノーベル賞を受け、米国の代表として、初めて広島を訪れ世界の平和を誓ったオバマ前大統領が「北朝鮮への軍事進攻を計画」されていたという事実の公表である。そして時の政権の中枢がそれを認めている。これは僅か2年前の政府内の事実である。さらには「ツイーター魔」と言われているトランプ大統領の280文字（英語の場合・日本語などは140文字）が「公文書」として保管されるという。これらのことを私たちはどのように受け止めればよいのだろうか。

日本の政治に民主主義はないのか

安倍・石破両氏による公開討論の場でも語られていた「森友学園をめぐる公文書改ざんや加計医学部開設に関する首相側近の言動」である。とりわけ森友改ざん問題は、闇から闇へと収束させようとした中で生じた一人の職員の自殺がある。また当時の責任者であった佐川理財局長の責任を曖昧にしただけではなく、再度の「証人喚問」については、数をもって拒否するという与党の代表が安倍総裁（自民党代表）である。それどころか新天皇即位に伴う代替わりに合わせ「国家公務員の恩赦」も検討され、しかも佐川氏もその一人であるという。（8月7日毎日新聞）

さらに「安倍総理大臣」の名を語った加計側の発言に対する安倍首相の答弁は意味あいまいさを重ね、その責任の取り方も今なお説明をしていない。

また安倍昭恵氏の立場である。野党は国会招致を求めた。昭恵氏はもはや安倍晋三総理の妻ではなく、政府秘書も有する公人であり、人格を有する一人の国民でもある。にもかかわらず首相は「私の妻は」と言う代弁を国会の場で述べる。そして総理夫人の秘書であった「谷査恵子氏」がいる。今は在イタリア日本大使館1等書記官に就いている。国会招致を求められた一人である。社会の常識からすれば、国内に滞在し説明をする立場ではないか。しかし、いつのまにか日本を離れ優遇の海外勤務である。

またもや、はぐらかしで逃げ切った安倍氏

そして総裁選の最中、同党所属の岡田裕二・神戸市議が11日、フェイスブックで「官邸からの露骨な恫喝と脅迫」と投稿。それだけではない、現農林水産大臣斎藤健氏は、安倍陣営からこう圧力をかけられたと公の場で主張している。対決をした石破氏は、遠慮気味に、そして慎重な言葉をもってこれらのことを指摘していたが、相も変わらずの「論点のはぐらかし」と「持って回った時間稼ぎ」の答弁に終始した。この日本国の最高機関である国会の場に「政治の民主主義」は存在をしないのか。

安倍政権は。来年七月の参議院選に焦点を絞ってきている。そうであれば私たちの運動もその視点に置かなければならない。

【参議院選挙を前にして福祉政策を考える】

社民党に期待する
高齢者の実態に具体的な政策を!!

現在65歳。60歳まで厚生年金に加入、40年間保険料を払い、年収が平均400万円を超えていた場合は平均月収は月額約38万円となり、受け取る厚生年金部分(比例報酬分)は年間約120万円。国民年金部分(基礎年金)は約78万円となる。よって合計の年金受給額は約198万円、月に直すと約16万5千円。しかし、そこまでの収入がない場合もある。賃金が常に右肩上がりと言うことはない。職務給制度のある企業であれば職務が変わり職務給が下がる場合がある。　(日本年金機構の水準により計算)

もちろん総報酬制であるから賞与(ボーナス)も関係をするが、賞与あり、なし。あるいはその額は千差万別でありそこは省く。

年金生活者には不安の老後が待っている

また国民年金のみの場合は、年間の支給額は最高でも約78万円であり月額にして約6万5千円である。要するに年収400万円程度の夫と、専業主婦であった妻の基礎年金を含めても「老後の年金額は月22万円を下回る」ということがあり得る。

そして今、非正規雇用や不安定雇用が拡大し続けているなかで、今後は「生活保護基準」以下の年金支給額しか受け取ることができない場合も多くなるだろう。さらに忘れてはならないことに年金受給者には各種課税や保険料の徴収がある。実質の手取り金額はさらに数万円減少する。加えて高齢期は疾病や介護など予期せぬ出費が増える時期でもある。

それまでに相当な準備をしていなければとなるが、その準備が不十分であることをもって高齢者の貧困問題を「自己責任」といって責められて良いのだろうか。

一般的な水準の年収をもってしても

「下流老人」という言葉を承知しているだろうか。この言葉を生み出したのは「ＮＰＯ法人ほっとプラス代表理事の藤田孝則氏」である。藤田氏によれば「下流老人」とは、生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者のことであり、２０１５年現在で、この下流老人に相当する人口は推定で600万～700万人がいると述べている。

そして下流老人に陥る主なパターンとして現役時代に「一般的な水準の年収」を得ていた者でさえも、次の出来事が原因となり「下流老人」に陥る危険性があると指摘している。

1・病気や事故、そして要介護の状態による高額な医療費や介護費の支払い。
2・高齢者介護施設に入居できない。
3・子どもがワーキングプア（年収200万円以下)や、引きこもりで親に寄りかかる。
4・熟年離婚による年金受給額や財産の分配が発生する。
5・独居老人状態で認知症を発症する。

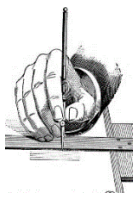
「あなたの老後は下流ですか？」と問えば、残念ながら多くの人が「イエス」と答えざるを得ない時代が間もなくやってくるだろう。

福祉行政の貧困に政治の責任はないのか

八月の末、岐阜の医療施設で熱中症と見られる5名の死亡事故が発生した。その施設の管理責任者は殺人罪として罪が問われようとしている。しかし、入所された皆さんの多くは、介護施設を探し当てようやく入所できた方々である。そして２００４年の東京都墨田区の「たゆまら介護施設」の火災事故を思い出す。「たまゆら」の管理責任が厳しく問われる一方で、福祉の現場を知る専門家からは、今日の日本における老人福祉政策への疑問の声が聞かれた。市民団体「市民福祉情報オフィス・ハスカップ」の主宰者・小竹雅子さんは指摘をしている。「経営者の責任は重いとしながらも、都内で受け入れる施設がない中で、墨田区自体が『たまゆら』を紹介し、そしてたまゆら側もそれを受け入れてきた。行政が無届け施設であると知りながらそこに頼らざるを得ない状況は解消されていない」と。

社民党を支持する多くの層は年金生活者である。そして一様に老後の不安を抱えている。そこに具体的な政策を示さない限り、党の支持拡大、強化はあり得ないと主張することに無理があるだろうか。

この課題を次回も取り組みます。皆さんのご意見をお寄せてください。
(事務局)



【福島原発事故被災地見学報告No.3】

７年後の
原発被災地を
おとずれる
岩下　潔さん
（喜多方市）

4月26日（木）郡山駅前10時集合・出発

1．午前11時28分　川内村役場到着。

副村長・教育長より次の説明を受ける。

２０１１年３月12日富岡町から８５００人が川内村に避難したが、６５００人しか収容できず２５００人は船引町方面に移動した。３月16日富岡町・川内村合同会議で全村避難決定し郡山市ビッグパレットふくしまへ移動（富岡町民１４００人・川内村民５２０人）

★役場前　線量０．０８ｕSv

2．昼食　各自コンビニで弁当購入バスの中で食べる。都路村を経由して大熊町の復興再生拠点地域・大川原地区（帰還困難区域）へバスの中から見学。

3．富岡町へ。桜で有名な夜ノ森地区のバリケード設置前（バリケードの先は帰還困難区域）でバスから降りて説明を聞く。

★バリケード前（除染終了）線量０．８ｕSv

4．帰還困難区域内の坂本武蔵野園（牧場）で坂本勝利さんの説明を聞く。事故当時22頭の牛がいた。避難から戻ったら27頭に増えていた。今は北海道の餌を与えているが20キロ圏内なので移動できない。

★牧場前線量　２．７ｕSv高い

5．富岡町役場　職員が働いていたが住民の姿は見えない。周辺の五階建ての団地や民家は空き家。

★役場前線量　０．３ｕSv

6．福島第二原発と津波被害（津波高22ｍ）の見えるところに移動。２Ｆも津波の被害を受けたが、かろうじて非常用電源が作動したために大事故から免れた。

7．新築されたＪＲ常磐線富岡駅。震災時は津波により倒壊し付近一帯がれきの山で、避難のため放置されていた。

8．駅近くにある放射能汚染物の焼却炉を車窓から見る。焼却炉は将来撤去される予定。Ｊビレッジに向かう途中、作付けされる田んぼを見る。しかしその隣地は除染土のフレコンパックが山積みされた仮置き場である。

9．楢葉町Ｊビレッジ　震災後、復旧工事のための駐車場、作業員宿舎等に使用されていたが、東京オリンピックでサッカーの合宿所になるため原状回復のため、芝生の張り替え工事がされていた。

10．宿泊地「天神岬サイクリングターミナル」

4月27日（金）午前8時ホテルを出発。帰還困難区域内の国道6号線を北上。車窓から見る大熊町・双葉町の繁華街は時間が止まったまま。「しまむら」や「ケーズデンキ」など荒れ果てた姿に、まさにゴーストタウンという言葉でしか表現することができないありさまだった。

11．津波被害が最も多いかった浪江町請戸地区へ。草原地帯に舞い込んだ感じがした。なんにもない。残っているのは津波で流されなかった2～3の建物と白い壁に覆われた除染土のフレコンパックがつまれた仮置き場。ただ、漁港だけが20億円のお金をかけて復旧していた。請戸地区には5千人が暮らしていたというが本当にここで生活していたのだろうかと目を疑った。震災直後、消防団の方が「助けてくれ」と叫ぶ津波被害にあった人達の声を聴いたが、原発事故で避難指示が出されたために助けることが出来なかった。原発事故さえなければ100人位は助けられたのではという報告がある。

12、大平山霊園（請戸地区に建立された慰霊碑と墓地・町営）津波は霊園が作られた直ぐ側まで押し寄せた。当時浜近くにあった小学校の生徒が教員に引率されここまで逃げてくる。犠牲者はなし。

13．浪江町役場に寄る。　役場は元に戻ったが周辺は空き家が目立つ。そして6号線を下り川内村役場へ。

★6号線の線量２．２ｕSv

14、川内村役場で二日間の案内をしてくださった白土正一さん（元富岡町生活環境課長）といわき市の仲間とお別れ。

15．都路村・三春町（昼食）・郡山駅解散。

コーヒータイム

38年前のクリスマス・イブ
中通りを襲った異常豪雪

１９８０年(昭和５５年)１２月２４日クリスマス・イブの日であった。イブの夜は、「ホワイトクリスマス」が似合う。そのようなイメージが絵本や物語そして歌の中で語られてきた。この日は正午過ぎから雪が降り始まった。その雪も大きな「真綿の塊」が落ちてくるような異常な状態であった。そして午後４時、会社は従業員に対し早期退社を通告した。

だがすでに積雪は３０センチを超え。バイク、自転車は用をなさない。自動車も駐車場からの発進に苦労し置いていった数も相当あった。また若者の中には終業後「イブ」を楽しむ服装の者もいた。足元も含めてみんなは通常の服装である。すでにバスも走らない路線が続出し、列車は遅延が始まっていた。自宅に無事帰れたか。また途中に保育所に寄るお母さんはそれこそ悪戦苦闘であったろう。

そして雪の重みは高圧線の鉄塔を幾つも倒した。停電、水道、ガスはストップ。電話も通じない。また反射型石油ストーブから「温風ストーブ」に切り替えられた時期であり、多くの家庭ではストーブも使えなかった。幸いに我が家は大型の「反射型石油ストーブ」を使っていた。水はふんだんにある。もちろん雪である。大きな鍋に入れて沸かし飲み水にも使ったし、煮炊きもできた。

文明の発展は被害を大きくする

今年は、日本列島を強烈な台風と秋雨前線の一極集中豪雨が西日本を襲った。そこに北海道の東部地区に震度７の地震が襲い４２名の人命を奪った。それだけではない。北海道全域が停電と言う異常な事態が発生した。

そこで随筆家「寺田寅彦」の天災を論じた文章を付記したいと思う。

「いつも忘れがちな重要な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である。―中略―　人類ががんじょうな岩山の洞窟の中に住まっていたとすれば、たいていの地震や暴風でも平気であったろうし、これらの天変によって破壊さるべきなんらの造営物をも持ち合わせなかったのである。もう少し文化が進んで小屋を作るようになっても、テントか掘っ立て小屋のようなものであって見れば、地震にはかえって絶対安全であり、またたとえ風に吹き飛ばされてしまっても復旧ははなはだ容易である。とにかくこういう時代には、人間は極端に自然に従順であって、自然に逆らうような大それた企ては何もしなかったからよかったのである。文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そして、重力に逆らい、風圧水力に抗するようないろいろの造営物を作った。そうしてあっぱれ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然があばれ出して高楼を倒壊せしめ、堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起こさせたもとの起こりは、天然に反抗する人間の細工であるといっても不当ではないはずである。災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているのはたれあろう文明人そのものなのである」。

（寺田寅彦随筆集第５巻から）

あらためて私たちは３・１１を振り返る必要があるのではないだろうか。　（降矢記）

73年前の
あの夜のことは忘れられない!!

戦争が終結をした８月１５日。その夜は空襲もなく「燈火管制」の覆いを電灯から取り外しゆったりとした気持であった。そのとき、遠くから太鼓の音が聞こえてきたことを鮮明に覚えている。何のためらいもなく音を出せた太鼓である。しかし、そこには若い男はいないだろう。「ばち」を持つ者は子どもか、年寄りか。それとも女房か。父や子そして夫の死を悼みその魂を迎える「盆太鼓」なのである。今もってあの夜のことは忘れることができない。

（ブログ・高齢社会を生きる）から・81歳